

## 渡邊 顕彦

### 1. はじめに

令和元年度国際社会青年育成事業フィリピン・ベトナム派遣団は約18日間フィリピンとベトナムに滞在し、団長、副団長以下14名の団員は「労働社会」を中心とした両国の現状や課題について多く学んだ。また日本文化も両国関係者、特に青年達に団の活動を通して多少なりとも伝えられたと考える。以下、事業の準備、実際の滞在、事後研修について報告する。

### 2. 事前研修～自主研修～出発前研修

事前研修は7月2日から6日まで、5日間かけて代々木のオリンピックセンターで行われた。団長、副団長の初の顔合わせが2日午前中の会議、団員との顔合わせが同日13時15分からの開講式であった。田尻副団長は同事業の経験者であり、団員も事業に応募し厳しい選別を経た、意欲あふれる青年達であることがみてとれる。対して団長は外部から任命された非経験者で、ある団員が後に述べたところによると初めはあまりにも見た目が若く(!)頼りなげに思えたそうである。開講式後、最初の団別研修で早速ユースリーダー候補として社会人のI君が手を上げ、皆の拍手で認められる。フィリピン・ベトナム派遣団は、最初から最後までI君が精力的に団をまとめあげたことが成功の大きな要因であったことは間違いない。

続く数日間は現地における日本文化紹介やギフト準備のほか、外務省職員によるフィリピンとベトナムの紹介、両国大使館訪問があり充実していた。ちなみに本派遣団団長はフィリピンで生まれ育ち、副団長は複数回のフィリピンおよびベトナムの訪問経験が既にあったが、最初から兩名より団員に向けて、これら2国を日本と比較した発展途上国であるというような目線ではなく、各々の豊かな歴史・文化的背景を持つ、学ぶべき対象として敬意を持って接するよう常に伝えることを心掛けた。事前研修中に長時間議論し決定した団目標にも訪問国への尊敬の念が表明されていることは一つの満足できる成果であった。

事前研修終了後、9月中旬まで2か月強の自主

研修期間がもうけられていたが、日本全国に散らばったままこの期間モチベーションを維持することは団員にとって大きな試練であったろう。本団では毎日分担してSNSアプリ「ライン」で「出発前研修まで〇〇日」といったようなメッセージを写真付きで発信し、訪問国に関係するニュースやテレビ番組等について情報交換も行った。また独自に訪問国関係者と面会し、その報告をアップロードした団員もあり、ほか協賛品獲得も団で情報共有し努力した。例えば副団長の提案でけん玉のイベントに一部団員が参加し、現地でギフトとして渡すけん玉と日本文化紹介の一環として披露できるけん玉スキルを入手するといった展開もあった。8月終わりには副団長と団長が個別に知人の日本在住ベトナム人に声をかけ、主に関東在住の団員を集めて食事会と勉強会を一回ずつ行った。

9月16日、出発前研修のため成田で3団が再集結した。一部の団員は久しぶりの再会となるが、皆元気で準備が整っていることが見受けられる。日本紹介の準備は遅れが心配されていたが意外と大丈夫のようである。3派遣団合同で出発前最後の成果発表を17日午後挙行し、18日には各団が成田空港より離日した。

### 3. フィリピン(マニラ)の主要訪問先

#### (1) 日本大使館とJICA事務所

18日中にフィリピンの首都マニラの空港に到着。着陸前の飛行機の窓からも、マニラは建築クレーンが林立し、経済が好調であることがうかがえる。空港では田口利行専門調査員に出迎えていただき、日本大使館に直行する。日本大使館では田口氏に大使館の業務や日比関係について詳細な説明をいただく。

翌19日、田口氏に再度同行していただきマカティのJICA事務所を訪れる。マニラでは、モール、主要ホテル等全てそうだが、JICA事務所のあるビルに入る際も厳重な持ち物検査があり、日本とは治安環境が違うことも実感する。JICA事務所では経済成長班の越智薫氏より、経済協力

についての全般的なお話やフィリピンにおける課題についてレクチャーしていただく。本事業中全ての場でもいえることであるが、この場でも質疑応答時に団員が次々と挙手し、活発なやりとりが行われた。

## (2) National Youth Commission (NYC)

19日午後は、フィリピンにおける本団の滞在の全般的なお世話をしていただく大統領府直属組織National Youth Commission (NYC)を訪れる。CEO/ChairpersonのRyan Enriquez氏、Commissioner at LargeのPaul Pangilinan氏ほか多数のスタッフにお迎えいただき、NYCの業務について説明を受ける。また同日夜は、城壁に囲まれた旧市街イントラムロス内にあるレストラン Barbara'sにおいて、NYC主催のウェルカムパーティーが開かれる。この歓迎会ではフィリピン式のダンスを含めた盛大なおもてなしを受け、団員一同現地のホスピタリティーに感激した。会場には加えてCommissionerのAnthony Laurence Diestro氏にもお越しいただいた。

NYCはこの日以降、多数のスタッフにフィリピン出発時まで同行いただき、大変お世話になった。また日本滞在経験のあるCommissioner Pangilinan氏には特に終始多大なご支援をいただいたことを記しておきたい。

## (3) 労働雇用省、海外雇用庁

翌20日は本事業のテーマに関する重要な訪問が二つ続いた。まずは労働雇用省の海外雇用庁を訪れる。こちらの入り口付近は長大な人の列に驚かされるが、海外雇用先の情報を求めたり、ほか必要手続きのために来ているとのことである。同庁事務所ではManagement Services Deputy AdministratorのJocelyn Sanchez氏やほかスタッフより、海外雇用者に対してフィリピン人労働者の長所をいかにアピールしているか、そして国外のフィリピン人労働者の権利保護にどのように努力しているか説明を受け、フィリピン政府の在外同胞保護にコミットする強い姿勢に感銘をうける。

同日午後は旧市街イントラムロス内の瀟洒な建物にある雇用労働省に赴き、Silvestre Bello III大臣への表敬訪問を行う。こちらは緊張して訪問に臨むが、大臣は最初から冗談を飛ばし、終始笑いが絶えない、リラックスした雰囲気での談話が進ん

だ。この大臣訪問の際、特に印象的であったが、他各所の訪問でもフィリピンの方々のユーモアと心遣いのあふれるおもてなし精神は団員の意識にも深く刻まれたと感じる。大臣との面会にはUndersecretaryのRenato Ebarle氏および前記NYC CommissionerのPangilinan氏にも陪席いただいた。

## (4) GK Enchanted Farm Innovations

21日はマニラの北方にあるブラカン州へむかい、GK (Gawad Kalinga) Enchanted Farmを訪問する。Gawad Kalingaはフィリピン国内に数千の拠点を持つ、社会起業を通じた貧困問題解消を目指す団体である。GKの主要拠点であるEnchanted Farmは国内外からボランティアを受け入れ、農村部で雇用を創出する事業を行っている。実際私たちもここでフランス人の農業関係者や、英語教師養成プログラムを運営する日本人と会った。

Enchanted FarmでCommunity-SE ManagerよりGKのミッションについて説明を受け、その後Management Teamの軽妙なガイドのもと、人形工場見学やココナツを使った菓子作り体験をする。Lopez氏は、ボディーガードとしての訓練を積み、海外で働く選択肢もあったがボランティア活動に意義を見出し今の職をしているとのことである。フィリピンの経済格差は昔から大きな問題であるが、その解決に努力する若者たちの姿はまぶしい。

## (5) フィリピン人青年達とのディスカッション

### (Seda Vertis Northホテル)

本団のマニラにおける宿泊地はケソンシティーにあるSeda Vertis Northホテルであった。このホテルはアヤラ財閥が経営する巨大モールが隣接している大変快適なものである一方、モールとは別の方向には貧民街が広がっているという、フィリピンの格差問題も考えさせる立地にある。このホテルで22日から24日まで、3日間かけて、フィリピン人青年12名と交流する機会をいただいた。両国の踊りや伝統的な遊び、地方紹介などのプレゼンテーションを双方で行い、またディスカッションコーディネータの采配のもとSDGsや両国の労働問題について活発な議論が行われた。日中の予定が終わってからも、団員たちは現地青年達の案内で隣接するモールを訪れ、

夜遅くまで交流を深めた。

#### (6) UP バランガイ、国立民族学博物館、イントラムロス

現地青年達との交流の最終日、24日の午後にはNYCスタッフの手配でフィリピンを代表する国立大学University of Philippines (UP)の広大なキャンパス、およびそれに隣接する貧民街UPバランガイを訪問する機会を得た。行き帰りには貸し切りのジープニーを使い、現地の伝統的な(最近では自家用車や、より快適な空調付き乗合バンの普及で若干少減ってきた)交通手段が体験出来たことは良い思い出となった。余談だが団長自身、フィリピンで幼少時代を10年以上過ごしたが、ジープニーに乗車したのはこれが初めてであった。

翌25日には午前中に国立民族学博物館を訪れ、スペイン統治時代前よりある精霊信仰や南部のイスラム社会について研鑽を深めた。近年のフィリピンでは、数百年の植民地時代に定着したスペインやアメリカ以外の現地文化・伝統に対しても社会の配慮や関心が向けられつつあることを感じさせられる。また午後には博物館のすぐ横にある旧市街イントラムロスにあるマニラ大聖堂を見学した。ただ、イントラムロスは近年歴史的建造物、そして古くから続く学校等施設も多くあるマニラの重要な一地区として整備が進んでいることは見てとれたものの、宿泊しているホテルからの交通の不便のため見学時間が短かったのは残念である。首都圏マニラの交通渋滞はすさまじく、私たちのバスも平均時速5キロから10キロで走り、しばしば徒歩のほうが速いのではないかと思わせるほどであった。現大統領が推進するBuild, Build, Build政策の一環として、日本の援助による公共交通機関(特に地下鉄)の整備が企画されていると聞くが、その需要が確かに大きいことも今回の訪問で深く感じた。

## 4. ベトナム(ハノイおよび近郊)の主要訪問先

### (1) 日本大使館とJICA事務所

9月26日は早朝にマニラを発ち、台湾を経由して夕刻ハノイに到着する。マニラと比べるとハノイ市およびその近郊の道路は車の流れは速く、また自動二輪車が非常に多いことが目に付く。ハノイでの出迎えはホーチミン共産党同盟Hai Linh氏ほかスタッフであった。

ハノイでは日本関係の施設として日本国大使館を27日、JICA事務所を10月2日に訪れた。日

本国大使館では松田悠希二等書記官より、ベトナムの現在の政治経済や日本との協力関係について説明を受ける。レクチャーの後、団員たちとの活発な意見交換があり、日本の外国人労働者受け入れ環境についての問題意識が松田書記官を含め広く共有されていることが特に印象的であった。またJICA事務所訪問時には小林龍太郎次長より日本のベトナムに対する支援について説明いただいた。松田、小林両氏の話からは、現社会主義政権下での日越経済協力関係はフィリピンのそれと比較すると日が浅いこともあり、様々な課題をばらみつつも、関係者の地道な努力により前進していることが理解できた。

### (2) National Committee on Youth of Viet Nam (NCYV)

National Committee on Youth of Viet Nam (NCYV)は本団のベトナム訪問を終始サポートしてくださった政府組織で、特にDeputy Head of International DepartmentのLe Hong Nhung氏およびスタッフHai Linh氏には多くの場で案内いただき、お世話になった。ベトナム到着の翌日早速NCYVオフィスを訪れ、Legal and Administrative Secretary, Chief AdministratorのLe Thi Lam Huong氏よりベトナムの青少年をめぐる環境について詳しくお話を伺った。NCYVをはじめベトナムで訪れた政府関係施設における対応は非常にプロフェッショナルで、こちらのあらゆる質問に対して数字の裏付けも示して即答するといった具合で現地関係者のデータ管理能力の高さがうかがえた。

### (3) 労働傷病兵社会省

同27日、ハノイの労働傷病兵社会省も訪れ、Directorate of Vocational Education and Training, Deputy Director GeneralのDo Nang Khanh博士より、同省が認識し、解決を目指すベトナムにおける労働訓練の問題について詳しく話を伺った。ベトナム以外でも時おり聞く話ではあるが、博士によると雇用と教育のミスマッチは同国で深刻な問題であり、社会の需要に応えない高等教育分野よりも、より雇用に直結する職業訓練校に多くの若年者を誘導する必要があるということが主たるメッセージであった。

無論国によって、また政策を立案決定する個人によってもこのような問題意識の有無や解決策についての

考え方には大きな相違があるであろう。しかし本団の青年団員達は、多くが日本の大学生であることもあり、博士が述べた方針に対して数々の率直な疑問をその場で口にし、その後もこのテーマについてはベトナム滞在中、団の中でしばしば議論された。この訪問をきっかけに、社会における政府の役割や存在感は日本、フィリピン、ベトナムで大きく異なることが認識されはじめたと感じる。

#### (4) Hanoi High-Tech Vocational College、 水上人形劇場

28日、29日の週末は団員達はホームステイ先に散らばり、団長副団長はホテルで待機した。30日月曜日には週末のホームステイから帰ってきた団員達と共にハノイ近郊のHanoi High-Tech Vocational Collegeに向かう。この学校は2009年に設立され、2018年に拡張された新しい職業訓練校である。同校キャンパスで自動車整備や電子機器操作の訓練をする教室を見学した後、広い講堂で文化交流を行う。副校長のTran Xuan Ngoc氏、同校のホーチミン共産党青年同盟書記のNguyen Minh Phuongに迎えていただき、また学校と本団双方よりダンスやほかプレゼンテーション、ゲームも行われ、終始賑やかであった。同日夜はハノイにある水上人形劇場を訪れ、ベトナム北部の伝統的な舞台芸術を堪能した。

#### (5) Phu Tho Vocational College、フン寺

10月1日火曜日、ホームステイから帰って直ぐの先日の活動により疲労が蓄積したのか、2名の団員の体調が思わしくないので、副団長も見守りと病院への付き添いのためハノイに残り、団長と団員10名でフート省に向かう。フート省へ向かう高速道路周辺は整備された広い農地に風光明媚な川や瀟洒な住居が点在し、西ヨーロッパの風景のようである。フート省職業訓練校では会議室に迎えていただき、学長Tran Minh Tuan氏やほか副校長、フート省ホーチミン共産党青年同盟の方々を紹介される。続いて職業訓練校の概要の説明があった。

職業訓練校訪問を終えると近隣の共産党施設に案内され、賑やかな昼食会となる。ただ昼食を終え、次の訪問予定地であるフン寺に向かおうとしたところ、団員一名が体調不良におちいる。状態が少々深刻にも思えたので、その場の団長の判断で団長、体調不良の団員、同行していたNCYV Le Hong Nhung氏および通訳Duc Anh Nguyen氏4人で近くの病院に乗用車で急行し、残りの団員はユースリーダ―I君の統率とNCYVスタッフHai Linh氏の同行でフン寺に行くこととなった。ベトナム建国の王を祀る著名なフン寺はこのように

団長・副団長を除いた一部団員のみで訪問することとなったが、NCYV側の準備したお供え物が奉納され、無事終了したとのことである。後、フート省で体調不良となった団員も幸いなことに同日中に病院で体調が回復し、団長と共にハノイに戻ることを得た。またハノイに残留した団員2名も病院からホテルに戻っており、次の日より全メンバーが団の活動に再度参加することができた。

#### (6) 労働社会大学

翌2日の午後は、ハノイにある国立労働社会大学を訪れた。大きな会議室で社会事業学部副部長、同大学ホーチミン共産党青年団書記、特別社会事業部門部長ほか多数のスタッフや幾つかの学生グループメンバーに迎え入れられ、社会事業学部の教育内容についての説明のほか、学生によるダンスパフォーマンスほか余興が披露された。日本側からは準備しておいたダンスやプレゼンテーションを行い、その後両国の青年や社会全体の課題について忌憚のない意見交換が行われた。

ちなみにベトナムでは、職業訓練校2校、社会労働大学、ホームステイ先の青少年、10月4日夕方、団員達の案内をした現地青年達、通訳(ハノイ国家大学4年生でもある)Duc Anh Nguyen氏など、様々な境遇にある若者たちと団員は交流し、社会主義体制でありながらドイモイ政策により大きく変化しつつあるこの国に対する理解を深めたようである。我が国における報道では来日するベトナム人労働者が取り上げられることが多いが、彼らの本国では出身地域や階層によって教育やキャリアが多様であることが団員にも見えてきたと感じる。

#### (7) チャンアン、バッチャン村

10月3日、ベトナム滞在8日目にはチャンアンを訪れ、3、4名ずつのグループに分かれて手漕ぎのボートに乗り川下りをした。流れはゆるやかであったが、途中幾つかの洞窟を通るのがスリリングであった。また古都ホアルーや元朝との戦いを記念する歴史的な廟も上陸して訪れた。

翌4日は陶器製造で有名なバッチャン村を訪れた。あいにくの大雨で道が一部洪水になっていたが大事はなく、何度か停電があったものの手作りの陶器製造過程も見学出来た。10月4日夜、ハノイの空港にベトナムからのINDEX参加青年達と集合し、同じ便で5日朝、成田に到着した。

## 5. 国際青年交流会議と帰国後研修

帰国後研修および国際青年交流会議は10月5日から11日まで、成田のホテルマイステイズプレミアで行われた。6日日曜日と8日火曜日、9日水曜日は、ファシリテーター源飛輝氏統括のもと労働社会について、フィリピン・ベトナム派遣団と各国青年達の間で活発な議論が行われる。また10月7日月曜日はプログラミング教育を行う都内の企業コードクリサリスを見学し、CEOカニムニダサ氏からも貴重なお話をうかがった。7日夜と9日夜は自由時間があり、日本青年と外国青年が連れ立って成田で食事や買い物、市内見学を楽しんだ。

10月7日夕刻は都内のホテルニューオータニに移動し、国際青年交流会議のレセプションに参加した。日本や外交政府関係の要人をお迎えしレセプションで交流できたことは光栄である。さらに今年の日本青年派遣代表としてフィリピン・ベトナム団団員が選ばれ、英語スピーチを行ったことは本団にとっても非常に誇らしいことであった。

10月8日夜は滞在ホテルで6か国からの派遣青年および日本3団の文化プレゼンテーションも含む盛大な交流イベントを行った。各国の民族衣装を着た青年達に負けじと日本青年達も法被を着、その中でフィリピン・ベトナム派遣の団長副団長もアニメキャラクターの着ぐるみを着用して多少なりともその場の雰囲気になじめたように思う。

帰国後研修は10月11日金曜日の日本参加青年による成果発表会および修了証授与式をもって正式に終わったが、事業を通じて国内外で培われた交流はその後も続いている。例えば10月19日はINDEX参加外国人青

年達の日本出発前最後の滞在日であったが、東京近辺在住の日本青年達も集まり、六本木ヒルズやほか都内の数か所を散策した。

## 6. おわりに

フィリピンとベトナムは東南アジアという同一地域に属し、緯度はそれほど変わらず、日本を含む海外に多くの労働者を派遣しているという点も共通している。出発前の研修では両国の違いが分からないという正直な声も団員の中からは出た。しかし今回、各国に約9日ずつ滞在し、政府機関や企業、NGO団体等を訪問し、両国の青年達とも深く交流したことによりフィリピンとベトナムの異なる魅力を実感できたことがまず大きな成果であった。ちなみに各団員異なる印象を得たであろうが、団長としてはフィリピンはやはり国際化の進捗、高い英語能力、打ち解けやすく親しみやすい民族気質が「労働社会」というテーマから見ると長所であり、対してベトナムは儒教的な規範意識、社会の調和、高い教育水準といった点からこれからの発展が期待できる国であると感じた。帰国後の活動でも両国の青年達と行動を共にしたが、フィリピン人青年達のいる所では常に笑顔と談笑が絶えず、ベトナム人青年(特に男性)達は公共交通機関の中で常に席を他人に譲って立っていたのが印象的である。

結論として今年度、各団で2か国を訪問できたことは大きな成果をもたらしたと考える。この事業を可能にさせていただいた内閣府、サポートしていただいた各国大使館、政府機関、全ての関連団体に深い感謝の意を表してまとめとしたい。

## 新たな挑戦と未来への第一歩

私にとってこの事業への参加は新たな挑戦であった。大学で東南アジア地域を学んでいることから、今回の訪問国であるフィリピン、ベトナムへの関心は強くあり、どちらも2回目の訪問であった。今回内閣府の国際社会青年育成事業へ応募したのは、これまでとは異なる視点から二国と関わり、より広い国際的視野を身につけたい、将来につながる経験をしたいという思いからであった。この事業を通じた出会いや経験の一つ一つがかけがえのないものであったが、特に印象に残っている経験を二つ書く。

一つ目は現地や帰国後の国際青年会議で行った日本文化紹介である。私は団員の中で日本文化紹介係を務め、中心となってパフォーマンスなどを考えた。これまでも日本文化を海外へ発信することをしてきたが、外国人が日本の文化に興味を持ってくれたり、日本にまた来たいと言ってくれたりするのはとても嬉しく、その度に日本の伝統や文化を誇りに思う。また、海外の人に日本文化を紹介することで、私自身も日本の良さに新たに気づかされることが多くある。日本人であっても普段こんな日本文化に触れる機会はない。海外の人に日本文化を発信することは、私自身が日本文化への理解を深める絶好の機会でもあるのだ。今回の派遣でも日本の代表として日本文化をたくさん発信し、交流する人に少しでも日本を好きになってもらいたいという思いで関わった。私達の団は主に、世界に一つだけの花、ソーラン節、北海道のイカ踊り、地元を紹介するプレゼンテーションなどで日本を紹介した。フィリピン、ベトナムどちらも親日国であり、現地青年との交流、大学や職業学校など様々なところで日本文化紹介を行ったが、日本を好きでいてくれたり、日本の文化に興味を持ってくれる人が多くいたことは、とても嬉しかった。特に印象的だったのは、日本が大好きなベトナム人の高校生との出会いであった。日本語が信じられないほど流暢で、日本の好きな俳優や映画などについても熱く語ってくれた。日本の大学に進学するために日本語の勉強を毎日頑張っていると言っていた。彼女達の熱意に驚いたと共に、私も頑張らなければと刺激を受けた。フィリピンで

も青年達と一緒にイカ踊りを踊ったり、ゆかたや制服を着せてあげたりしてとても喜んでくれた。

また、私たち日本人も現地の文化を楽しんだ。特にベトナムでの3泊4日のホームステイはとても貴重な経験であった。お酒を飲みながらホストファーザーと語ったり、子供達とお出かけしたり、家庭料理を食べたり。その場で殺した鶏が夕飯に出てきた時は少し驚いたが、旅行や一時的な訪問で触れる表面的な文化だけでなく、実際に現地の人々の生活を体験できたのはとても貴重な経験であった。

帰国後の国際青年会議での文化パフォーマンスでは7か国からの青年達が歌や踊りを披露した。ここでは訪問した国以外の青年達とも関わることができ、多くの異なる文化にも触れることができた。それぞれ自国の民族衣装を身にまったり、各国のダンスを全員で一緒に踊る場面もあったりと国の違いを超えて交流を楽しんだ。互いの文化を紹介し合い、違いを楽しめるということは素晴らしいと改めて感じた。

今回の訪問で印象に残っているもう一つのこととはフィリピン、ベトナム国内の格差を身をもって感じたことだ。フィリピンで私達の滞在したホテル周辺では大規模な都市開発が進み、大型ショッピングモール、高級ホテル、新しい高層ビルが立ち並んでいた。一見とても発展しているように見えたが、私が滞在したホテルの18階の窓から見下ろすと、そこにはスラム街が広がっていた。フィリピンが格差大国であることは知っていたが、実際にここまで格差が目に見えて存在しているということに衝撃を受けた。スラム街のすぐ横ではさらに建設工事が進められていて、スラム街がだんだん縮小されていく様子が手に取るようにわかる。こうして住む場所を奪われた人々はいったいどこに行くんだろうと考えた。政府機関の訪問を通して、国の発展にばかりに目を向けて経済発展を進める政府と、そこから取り残される人々との乖離を強く感じた。

未来のフィリピンへの希望を失いかけていた時に、希望を持たせてくれたのがGawad Kalinga (GK) という

NGOへの訪問であった。GKはフィリピンの貧困解決に取り組む国内最大のNGOであり、国内外に多くの拠点を持つ。海外からのボランティアやインターンも多く受け入れていて、私達が訪問した時にも日本やヨーロッパからのインターン生が活動していた。このようにフィリピンの貧困、格差を解決しようと海外から来て活動している人がいることは、フィリピンの大きな希望であると思う。今後さらに開発が進んでいくこの国で、そこから取り残される人々にどのようにアプローチしていくかは大きな課題であり、海外からの支援により少しずつフィリピンの貧困が減少していくという希望もあると感じた。

一方ベトナムでは、フィリピンに比べるとそこまで目に見える格差は大きくなく、私達が訪問したハノイ周辺ではスラム街や外で飢えている人を見かけることはなかった。しかし人々の生活を見る中では格差を感じることもあった。

フィリピンからベトナムに移動し、はじめに立ちがたかったのが言語の壁である。私達が訪問した施設や学校のほとんどのベトナム人は英語が話せず、コミュニケーションが十分に取れない。そのため交流もフィリピンでのものに比べて浅いものになってしまい、もどかしさを感じていた。もちろん言語以外の手段でコミュニケーションを取ることできるが、やはりそれには限界があり、深い会話をするには共通言語が必要であった。ベトナム人と思うように交流できない数日間を過ごし、3泊4日のホームステイに対してとても不安を抱いていた。しかし、ホストファミリーは英語がとても流暢であったのだ。7歳と11歳の子供達はなんの躊躇もなく私と英語で会話してくる。ここまでで出会ったベトナム人は大人でさえ英語が話せる人はほとんどいなかったにもかかわらず、なぜこの子供達はこんなに喋れるのか、どんな教育を受けてきたのかととても興味を持った。しかしこの子供達の教育環境はベトナム人の大半とは違うということにも気づいた。子供達に「なんでこんなに英語を話せるの?」と聞くと「私のクラスの子は

みんな話せるよ」という答えが返ってきた。ホストファミリーの家は完全に外の世界とは隔離された富裕層が住むエリアにあり、子供達はこのエリア内にある小学校に通っていたのだ。このエリアには病院、学校、レストラン、スーパーマーケット、スポーツジムまで全て揃っており、生活がエリア内で完結している。限られた人しか入れないため安全で安心できる環境であるが、ここで育った子供達は一生外の世界を知らずに生きていくのかもしれないと思った。一見格差がないように見えたベトナムにも一部の富裕層と大衆ではこんなに生活の違いがあることに衝撃を受けた。また、親の経済格差が子供達の教育格差に大きく結びついているということも強く感じた。

二つの国の国内格差を目の当たりにし、その大小にかかわらずこの国でも不平等が存在するのが今の世界の現実だと感じた。格差を完全になくすことは可能であるのか。今の私に答えを出すことはできないが、今後考えていくきっかけになったという点でとてもよい経験であった。

「認め合い、共に拓け、輝く未来!」これは私達の団が7月の事前研修で掲げた目標である。この目標には、互いを尊重し未来に続く友好関係を築き、それぞれが新たな挑戦への一歩を踏み出すという団員全員の思いが詰まっている。私はこの事業を通してとても多くのことを学んだが、この経験を未来へつなげられるかは自分次第であると思う。この経験を無駄にしないためにも、この事業を通じた出会いを大切にフィリピン、ベトナムとの関係を持ち続けていくこと、この経験を生かして今後も国際交流活動に関わり、青年の国際交流を盛り上げていくことを次の目標として新たな挑戦への一歩を踏み出していきたい。

最後に、この1か月間、輝く未来に向かって走り続けた団長、副団長を含めた日本人メンバー14名との絆はかけがえのないものとなった。この団の一員としてこの事業に参加できたことをとても誇りに思う。

## 新たな視点 (perspective) を持つこと

私が自分の中で設定したこのプログラムのテーマは「視点 (perspective)」である。この社会を理解し考える際に、自分の中にある既存の視点のみを用いた考察だけでは不十分であり、新しい多様な視点を取り入れることが重要であると考えている。私たちは、往々にして今の自分の周囲の環境が普通であると捉え、日本を基準とした色眼鏡をつけて物事を見て判断しがちである。しかし、それでは現地の人々の考え方や価値観、社会実情を正しく認識することができない。このプログラムでは、現地の方や招へい青年、派遣団の団員など非常に多くの人に出会い話をすることができ、彼らから今までの自分になかったたくさんの新しい視点 (perspective) を得ることができた。

私たち派遣団のテーマは「労働社会」であったため、両国では労働問題を扱う省庁や大学、職業訓練校などを訪問した。その中で、ベトナムでは、就職において実践経験や何らかの技能を持っていることが大変重視されていることが分かった。そのため、就職活動を有利に進めるために、大学を卒業した後に専門学校に入り直す人も多くいるようだ。近年日本で重視されてきている教養教育は、ベトナムでは将来出世を目指す少数のエリート層に必要なもので、それ以外の一般労働者には、教養よりむしろ実践経験や身につけた技能の方が評価されるという。この見解に対してベトナム国内から異論もあるだろう。当初、私はこの見解を国家の官僚が述べていたことに非常に驚きを感じていた。なぜなら、その時私は高校や大学で教養の大切さを教えられ、自分自身の中でも教養は普遍的価値を持つものであると信じていたからだ。そのため、この官僚の見解を非常に否定的に捉えてしまった。「このような考え方に基づいて政策立案を行っているから、うまくいかないのだ」とまで思ってしまった。実際にそのような側面はあるかもしれないが、冷静に自分の中で考え直してみると、この実践経験や技能を重視する考え方は、現在のベトナムの社会状況に合致した政策であると捉えられるのではないかと考えた。もちろん、発展途上国の将来の経済発展を考えると、このままの制度を維持しては未来永劫の発展は望めないだろう。しかし、現在のベトナムはモノづくり産業が盛んであり、就職から

定年まで工場で働く多くのブルーカラーの労働者にとって、文学作品や地誌などの教養は必ずしも仕事に必要というわけではなく、与えられた仕事を正しく行う能力の方が評価されるのであろう。この考え方に基づけば、あの時、官僚が述べていたことも納得できよう。私は日本の教養教育を重視する考え方にとらわれ、偏った視点から物事を考えすぎていたと感じた。国が違えば、その国の教育で重要とされるものも変わり、私たちが普遍的に重要と考えているものの価値も異なる。教育において、普遍的で大切なものは存在しないのではないかとさえ感じた。

このことに限らず、私たちは往々にして日本の方法が正しいと考え、他の考えや価値観をいとも簡単に否定してしまうことがある。恥ずかしながら、現地で、私は他にもそのように考えたことが多々あった。しかし、その国にはその国の、日本には日本の、事情や社会的背景があり、そう簡単に否定することができない。むしろ、互いの事情やそれに対するその国独自の工夫や捉え方を知り、共に学び合い互いを尊重する精神が必要であると感じた。新たな視点 (perspective) が得られた。

また、「コミュニティ」の社会的重要性を学んだ。私たちは、フィリピンで貧困層の生活や起業を支援するNGO団体を訪問した。その中で、主婦層の女性が働いている、ぬいぐるみなどをミシンで作る工場を視察した。そこで、私はある1人の女性から彼女のライフヒストリーを聞いた。彼女は、ここで働く前は他の工場で働いていたが、両親の介護を機に退職し介護と子育てを行っていた。その後、縁があり、子供の大学進学資金を稼ぐためにここで働くようになったそうだ。彼女は、自分自身の仕事に加えて、他の従業員に作業を教えるというマネジメントの仕事も任されている。彼女は、「ここでは、他の人と協力して働くことに生きがいを感じている。」と話していた。私は、彼女にとって仕事というものが単にお金を稼ぐためだけのものではなく、コミュニティを形成し他者との人間的つながりを持つコミュニケーションの場となっていると感じた。私たちはよく貧困層の支援と聞くと、まず彼らが職とお金を得ることに集中して支援活動を行いがちであるように思うが、それをより促進させるためにもコミュニティという

要素に重点を置くべきであると考え。新たに他者との関わりが生まれ、相互に影響を与え刺激し、困難な時には支えあう関係となる。現在日本で失われつつあるコミュニティーというものが、どれほど重要であるのかを学んだ。ここでも、新たな視点 (perspective) が得られた。

さらに、このプログラム中には現地の方と話す機会がたくさんあった。私は現地の様子を知るために、自分の目で見、耳で聞き、現地の方と会話することを重視している。現地の方は当事者であり、現地のことを最もよく知る「専門家」である。彼らは普段の仕事の愚痴や家族の話、おいしい食べ物の話などたわいもない話から、「大きな声では言えないけどね」「ここだけの話ね」と、政府への批判や世の中に物申したいことまでたくさん話してくれた。彼ら「専門家」の情報は、日本には決して手に入らないものであった。特に、政治について私が尋ねると、政府の汚職や経済発展を重視する政策への考え方を聞くことができた。政治の話題については、私の質問したこと以上の内容を答えてくれたが、実際にはこのようなことは思っているも日々の生活では口に出すことはそれほど多くないらしい。労働者や学生、主婦といった様々な立場の人の話は、同じ事柄に対してもその人自身の立場によって視点が少しずつ異なっていて、興味深かった。彼らは自分の国の政府の政策について無批判に受け入れたり、無関心でいたりするのではなく、批判的に捉えしっかりと意見を持っており、彼らの政治への意識の強さを感じた。政治の話や家族の話、自分の住む町の話など、いずれの話においても、彼らの発言からは「当事者意識」というものを感じた。「自分がそこに関わっている、だからこそ、少なくとも何か意見は持たなければいけない」と彼らが日々感じているように読み取れた。このような社会への向き合い方は、今後社会が発展し、様々な社会問題が出てくる中で必要不可欠である。多くの人との出会いから、新たな視点 (perspective) が得られた。

このプログラム期間を通してたくさんの人に会い、そこで私はたくさんの優しさを感じた。派遣団の団員のみんなは、体調があまり良くなかった私を常に気遣ってくれた。これにはいくら感謝してもしきれない。また、私はベトナムで現地の病院に行くという機会を得た。そこは日本人の医者が常駐する病院であり、そこで働いているベトナム人

の看護師が、慣れない日本語を使って衰弱しきっている私を励まし、点滴を打ってくれた。

ホームステイでは、ホストファミリーは私の要望を聞き、早朝からマーケットへの買い出しに連れて行ってくれ、毎食異なる手作りのベトナム料理を用意してくれた。そして、家族や親戚などたくさんの人が集まり私たちを歓迎してくれた。最後の夜には、翌朝から学校や仕事があるにも関わらず、子供も一緒に家族全員でナイトマーケットに行ってくれた。そのように、家族みんなでもてなそうしてくれたことがとても嬉しかった。

また、現地でのローカルユースとの活動や帰国後の国際会議の場で、英語を使ってディスカッションをする機会があった。英語を話すのが非常に苦手であった私は、自分が伝えたいことをうまく伝えることができずに、もどかしい気持ちになることが多かった。しかしそんな中、海外青年たちは辛抱強く私の話を聞いてくれ、「You mean ~, right?」などと私の言いたいことを理解しようとし、私が話しやすい環境を作ってくれた。

私はこのプログラムに参加し多くの学びを得たが、その学びは多くの人の支えや優しさがあったからこそ得られたものであることを実感した。

以上のように、今回の派遣では、自分にとって新しい視点 (perspective) をたくさん得ることができた。多様な経験を持つ派遣団の仲間からも多くの新しい視点を得た。私は、将来どのような仕事に就きたいのかという具体的な考えはまだない。むしろ、このプログラムに参加して、自分が本当に何をしたいのか、自分が何をすべきなのか、よく分からなくなったほどだ。高い目標・ビジョンを持ち、自国で社会貢献活動を精力的に行っている青年たちの意識の高さと比較して、私自身の意識の低さを痛感したためであろう。ただ、1つ強く思ったことは、今後もフィリピン・ベトナムを含めた東南アジア地域についての理解を深めたいということだ。そこにはまだまだ、私にとっての新しい視点・発見があるだろう。現地でフィールドワークを行い、人々が何を考えているのかについて探究したい。他者を理解し、自らとは異なる新しい視点を持つ現地の人々と関わり続け、新しい視点をたくさん取り入れる人生を送りたいと考える。そして、その長い人生をかけて何かの形で、私たちの団目標である“Create a bright future with mutual respect!”を達成したい。

# ディスカッション成果 令和元年度 フィリピン・ベトナム派遣

## 1. ディスカッションの概要

日時	9月23日
場所	セダホテル (マニラ)
テーマ	皆の幸福を追求しながら、草の根からコミュニティを発展させるためには
参加者	日本青年12名、フィリピン青年12名
スケジュール	9:00- 9:15 アイスブレイク (ダンス) 9:15- 9:45 自己紹介 9:45-10:30 アイスブレイキング (tower of build) 10:30-11:00 アイスブレイキングに関する解説 11:00-12:00 ディスカッションに関するイントロダクション 12:00-13:00 ディスカッション (1) 14:00-16:45 ディスカッション (2)

## 2. 分科会の概要

トピック1	一極集中
参加者	日本青年4名、フィリピン青年5名
成果	<p>1. フィリピンの現状</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● マニラへの一極集中が進み、その影響で都市部では労働市場が飽和している。</li> <li>● 一極集中の流れにインフラや制度が追いついておらず、交通渋滞や公害 (河川や大気の汚染など) が深刻化している。</li> </ul> <p>2. 日本での現状</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 都市圏、おにも東京への一極集中が進み、地方では労働者不足が深刻化している。</li> <li>● 一極集中に伴い、地方経済が鈍化しているだけでなく、地方と都市の間で教育や医療、福祉などの格差が拡大している。</li> <li>● 人やものが集まる都市部における、災害やテロ等に対するリスクマネジメントが十分とは言い難い。</li> <li>● 地方の過疎化が進行し、交通や雇用、進学などの面でより「便利」な都市部への人口流出が進行している。</li> </ul> <p>3. 現状を改善するために出された提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 市町村や行政が補助金を出すなどして、企業を地方へ誘致し、雇用を創出する。</li> <li>● 地方の若者に向けて、学校教育などを通して起業家精神を涵養し、地方での起業を支援する。</li> <li>● 地方を発展させるため、その地域ごとの特性を見つけ、促進、活用するとともに、国内だけでなく世界をターゲットとしたビジネスを展開する。</li> </ul> <p>4. 上記現状・提案から学んだこと・気づいたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 同じ「一極集中」でも現状が大きく異なる場合もあり (例えば、東京とは違ってマニラでは、人口が雇用の需要よりも増え、仕事にありつけない人がたくさんいる)、いかなる世界的問題でも地域ごとの特性を理解することは大切だと感じた。</li> <li>● 人口が一部に集中し地方が取り残されつつある中で、都市部にはない各地方の魅力を発信し、その地方独特の文化を醸成していくことが、これからさらに求められるのではないかと感じた。</li> </ul>

## マニラでの現地青年とのディスカッション(トピック1)感想

滞在先のホテルにて、フィリピン全土から集まった青年とフィリピン人のファシリテーターとともに丸一日ディスカッションを行った。全体としては、皆の幸福を追求しながら、草の根からコミュニティを発展させるためにはどうすればよいかということをテーマとして掲げた。時折ファシリテーターからのレクチャーも受けつつ、そもそも発展とは何か、どのような社会を私たちは望んでいるのか、今日私たちの社会が抱える課題は何か、どうすればその課題を解決することができるのかといった本質的な質問に一つ一つ向き合い、テーマの核心に迫った。

現地青年とのディスカッションでは、私たちが望む社会とはどのような社会なのか理想を共有することから始まり、少子高齢化や貧富の差など、両国がそれぞれ抱える問題を列挙しながら理想とのギャップを再度認識した。理想に関しては両国青年ともに同じようなものを思い浮かべているが、やはり現実となると両国間で焦点が大きく異なり、その相違を感じながら議論することは新鮮で、インスピレーションを得られた。そのなかで、一極集中というのは日本だけでなく、フィリピンも抱える問題ということが分かり、これを原因

と結果に分けながら深掘りしていった。そこで興味深かったのは、東京では求人がたくさんあり、それが東京の魅力の一つであるのに対し、マニラでは求人よりも人口が多くなり、仕事がなく困っている人がたくさんいるという相違点があったことである。人が集まれば集まるほど経済規模が拡大し、限りなく求人があると思いついていたことにはっとした。一極集中という、一見するとどこでも同じように見える問題でも、詳細に見ていくとこのように地域によって状況が大きく異なることが分かり、いかなる問題においても、それが起きている場所ごとの現状や特性を理解したうえでアプローチしていくことが大切だと感じた。

現地青年と議論し、意見を取りまとめ、発表するという経験は刺激的だった。彼らと共に明るい未来をどのようにして創っていくかという話をするのは、自分もさらに頑張らなければならないと奮い立たせてくれるものであり、未来を自分たちが切り拓いていくんだという実感を得た。また、自国の実状をお互いに話す中で、日本とはどのような国なのかを再度見つめ直し、さらに自国について知りたいと思ったと同時に、フィリピンをはじめとする他国により一層の関心を抱いた。



トピック2	農業従事者の減少
参加者	日本青年4名、フィリピン青年4名
成果	<p>What is the future that we want? のテーマが与えられ、はじめに「development (開発)」をどう定義するかについて議論した。開発と聞くと経済的豊かさを思い描きがちだが、必ずしもそれだけが開発ではない。私たちは開発を三つに分類し、「経済発展 (インフラ整備・貿易・投資・テクノロジー)」「人間中心の持続可能な開発 (心身共に健康である社会を目指し、教育や情報へのアクセスを格差なく受けられる)」「環境への配慮」を視野に入れて開発を進めていく必要があると話合った。</p> <p>その後のディスカッションではグループを一つの村とみなして課題を選び、その原因と結果について議論した。私たちのグループは、日本とフィリピンの両国が抱える問題をピックアップし、「Decreasing number of farmers (農業従事者の減少)」について話した。原因にあげられたのは、低所得・不安定な収入・低価格な輸入品・農業従事者に対する固定観念・気候変動や政治、経済の状況に影響されやすいことであった。農業従事者減少の影響により輸入品への依存度の拡大と食料自給率の低下や国の産業地盤が脅かされるといったことが懸念される。</p>

## マニラでの現地青年とのディスカッション(トピック2)感想

このプログラムの中で私が一番心配していたのがこの現地青年とのディスカッションであった。事前研修で自らの英語力、知識不足を実感してからここまでできる限りの準備はしてきたが、それでも不安であった。しかしそんな私の不安を払拭したのがフィリピン人であった。会ってすぐにフィリピン人はシャイな日本人にとっても気さくに話しかけてくれ、いつのまにか私の緊張も解けていた。これぞ彼らの国民性だと思った。

ディスカッションはフィリピン人4人と日本人4人の8人チームで始まった。はじめに What is development? という問いについて話し、私たちのチームでは開発はGDPで示される経済成長だけでなく、人々の教育や情報へのアクセスを拡大するという意味での「人間中心の開発」という視点からも議論されるべきだという考えにまとまった。経済発展による格差の拡大や環境破壊などが議論されるようになった今、より人に目を向けた開発を考えるべき時がきていると実感した。

続いて、農業従事者の減少についてディスカッションした。近年日本では少子高齢化や地方の人口減少により農業の後継者不足が問題になっているが、これはフィリピンでも共通の課題であるということがわかった。異なる国の人と同じ課題について話し合い、意見を交換し合うことで、同じ課題でも異なる部分はあり、解決策は必ずしも一つではないということを感じた。それぞれの国の状況に合った解決策を考えなければならない。

短いけれどとても濃い時間を過ごすことができた。ディスカッションではやはりフィリピン人の発言力に圧倒されることもあったが、刺激を受けながら自分自身も意見を言うことができ、とても実りのあるものであった。ディスカッションだけでなく、文化パフォーマンスをしたり、夜は一緒にショッピングモールに出かけたり。フィリピン人青年との友情と絆はかけがえのないものとなった。